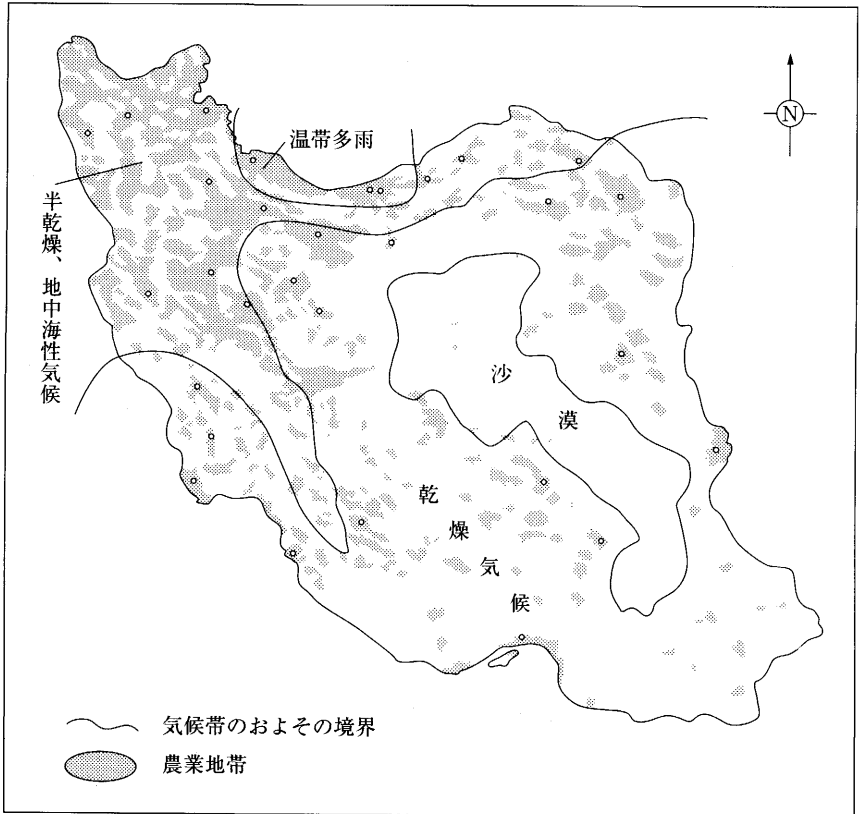


図1 イランの気候分布と農耕地



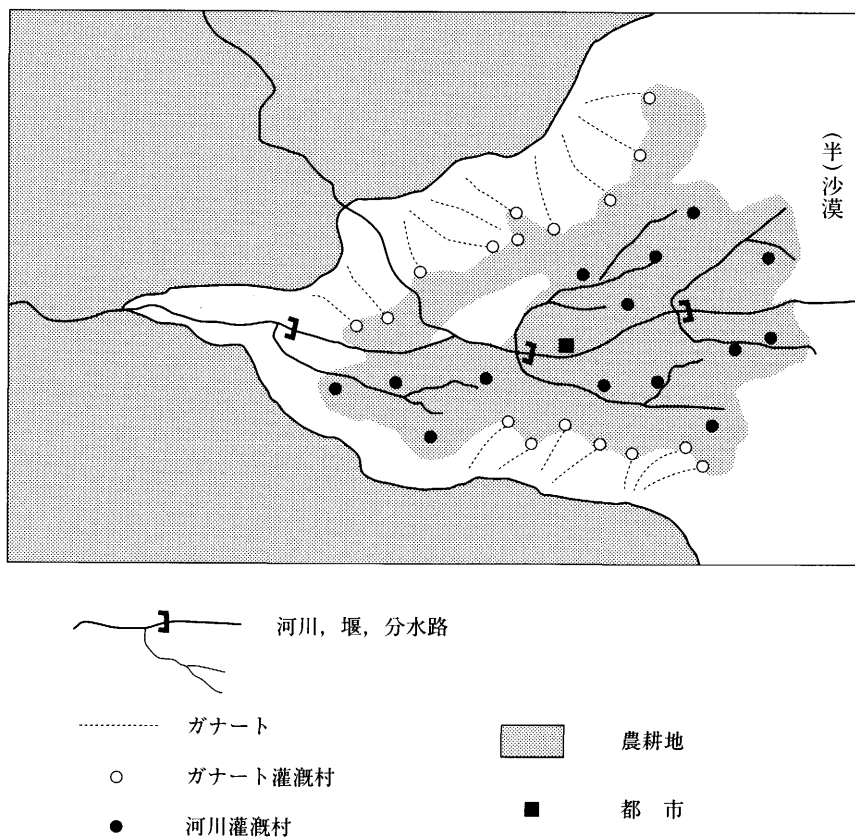
(出所) P. Beaumont, *The Middle East: A Geographical Study*, London: John Wiley & Sons Ltd., 1976, pp. 448-449より作成。

イランは日本の国土のほぼ4倍の面積をもつ。気候は多様性に富み、ルート、キャビールの二つの大沙漠が内陸を占めている一方で、カスピ海沿岸には日本の農村を彷彿とさせる温帯多雨地帯が帯状に分布している。

年間降水量が400ミリを割る乾燥気候帯では地下水や地表水の分布によって生活と生産の場が決まり、オアシスに都市と農村が分布し固有の地方を成立させてきた。

また半乾燥と地中海性気候帯では天水依存の農業が可能なために農地はより拡がりをもって分布している。しかしオアシス農業よりも生産性は低く、かつて、ここから乾燥気候帯に向かう草地に羊やヤギを追う遊牧民の放牧地が広がっていた。

図2 イランにおけるオアシスの概念図



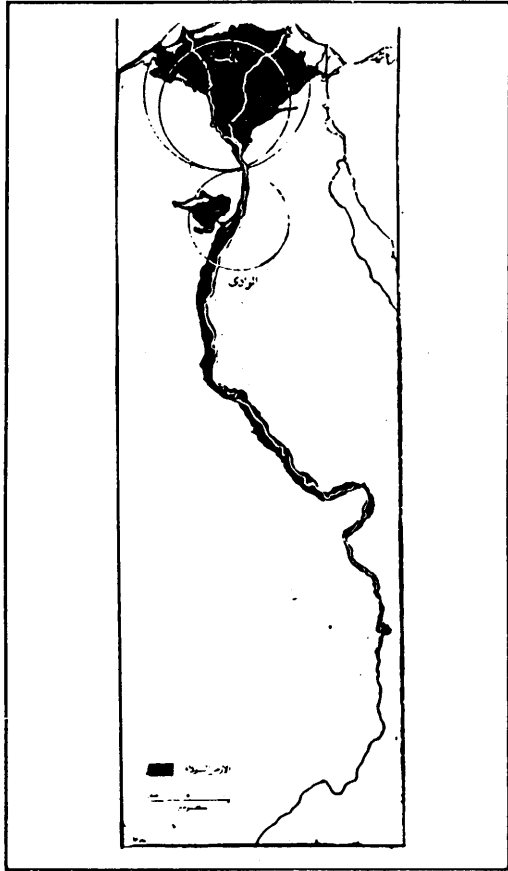
(注) ガナートについては第3章の注(31) (180ページ) 参照。

(出所) 後藤作成。

イランの河川のほとんどは山地の雨水を集めて内陸の沙漠や盆地に向かって流れている。流量は季節によって変動が大きく、途中オアシスを潤し、さらに流下して沙漠に消える。流量の多い川では盆地に塩の湖を作ることがある。

乾燥気候帯の山裾に豊富な地下水が流れているところがある。ここには地下水路で農業用水を地上に導くガナートと呼ばれる灌漑施設が発達していた。その数はイランに3万以上あったといわれているが、オアシスは主としてこのガナートと河川によって水が確保されていた。

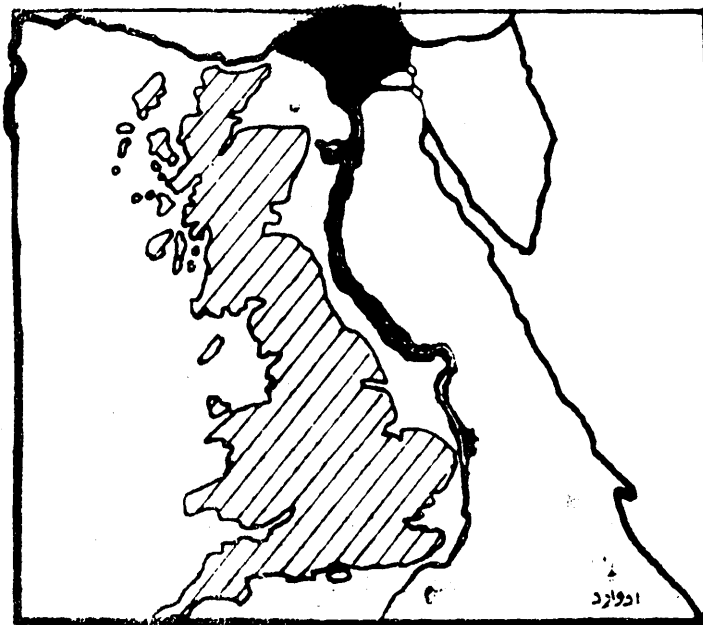
図3 線形のエジプトとその面積の円



(出所) ガマル・ヒムダーン『エジプトの個性』(改訂版)第4巻, アーラム・クトブ社, 1984年, 第16図(431ページ)より。

「エジプトの居住地域は, その極端な長さで特徴づけられる。……それは幅のない長さというものであり, 約1200kmの長さに対し, 3万6000km²の面積しかなく[国土面積は100万1500km²], おそらく直径200km以下の円の中に収まってしまおう。こうした形態は, 確かに生産や輸送, 行政といった点では経済的でないが, しかし歴史的にみれば驚くべき生命力をもち, まさにこの形態こそがアフリカに達する深さをエジプトに与えたのである。」

図4 エジプトとイギリス：面積と拡がりの比較



(出所) 図3に同じ、第5図(252ページ)より。

「両者は国土の拡がりにおいて極めてよく似ているが、居住面積では著しく違いがあり、しかも国土面積全体は全く異なっている。」